

氏名	萩原 史織
ヨミガナ	ハギワラ シオリ
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博音第296号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	(論文) 音楽の生涯学習における学びの内容とその質的変容 —《第九》を歌うアマチュア合唱団の事例研究—

論文等審査委員

主査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	佐野 靖
副査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	山下 薫子
副査	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	毛利 嘉孝
副査	東京大学	准教授	(教育学研究科)	新藤 浩伸

(論文内容の要旨)

本研究の目的は、アマチュア合唱団の活動を音楽の生涯学習と位置づけ、団員たちの音楽の学びの具体的な内容を明らかにするとともに、活動を継続するなかで彼らの音楽の学びがどのように質的に変容してきたかを明らかにすることである。本論文は、3章構成である。

第1章では、指導者が団員たちに何を伝えているのかをとらえるために、東京フロイデ合唱団における発声指導場面および《第九》の指導場面に沿って指導内容と方法の特徴を分析し、指導内容のカテゴリーを作成した。2011年から2015年にわたる5年間の練習のなかで、指導内容と方法には変容が見られ、指導者は、団員たちとよりよい音楽をつくりあげていくこと、そして、団員たちにとって、よりわかりやすい言葉や方法で伝えることを変わらずに追求するなかで、自身の指導を見直し、試行錯誤するなかで変容してきた。彼は自身の変容を「自分の成長」ととらえており、彼自身も活動を通して学び続けてきたのであった。

第2章では、団員たちの音楽の学びの内容を明らかにするための方法として、彼らの楽譜の書き込みに着目し、第1章で作成した指導内容のカテゴリーをもとに書き込みの内容のカテゴリーを作成し、分析を行った。書き込みの内容を8名の団員と比較した結果、共通して多く書き込まれる傾向にある観点があること、また、言葉で書き込みをする場合、その多くが指導言を忠実に引用する形で書き込まれていることが明らかになった。さらに、書き込みの内容を活動歴と照合し比較してみると、新入団員はブレスやアーティキュレーションなどの歌うために必要なことを多く書き込んでいるのに対し、中堅からベテランの団員たちは、音楽の要素や構造に関する内容を多く書き込んでいた。このことから、活動歴と書き込みの内容との間には、ある程度かかわりがあることが示唆された。団員たちが楽譜に書き込みをした内容は、彼らの音楽の学びそのものであり、同時に、指導者とのコミュニケーションの履歴として機能していることが明らかになった。

第3章では、活動の継続における団員たちの変容を明らかにするために、インタビューの分析を行った。彼らは、意識せずとも質的に変容しており、音楽の学びの質的変容は、技能面での変化、指導者の指摘に対する理解、楽曲に対する理解、音楽との向き合い方や音楽に関する思考の4つの観点に集約された。また、団員たちの音楽の学びが質的に変容してきた過程には、変容を促す5つの契機が存在し、それは、達成感の経験、音楽にかかわる気づき、自己省察、目標の設定、意欲を引き出してくれる環境であることが明らかになった。

以上の研究結果から明らかになったことは、以下の2点に集約される。

第一に、東京フロイデ合唱団の活動が、学びの場として機能しているということである。団員たちは、「学習」をするために合唱活動に取り組んでいるわけではない。夢中になって、ただひたすら合唱することを楽しむなかで、結果として彼らは学んでいたのである。団員たちへのインタビューおよび楽譜の書き込みの内容についての質問を実施したことによって、団員たちが自身の歩みを省察する機会となり、自身の学びを自覚することにつながったといえる。もっとも、合唱活動の場が豊かな学びの場として機能するためには、指導者自身も学び直すことが必要である。団員たちによりわかりやすく説明するにはどうしたらよいか、よりよい音楽を団員全員で求めていくにはどうしたらよいかを模索し続けるなかで、自身の指導を見直そうと試行錯誤する。そのような指導者の姿勢は、団員たちの音楽に向かう真摯な姿勢と学ぶ意欲をかきたてる一つの原動力になる。指導者と団員とが音楽的に交流するなかで学び合い、そして互いに変容し合える学びの共同体として当団の活動を見出すことができた。

第二に、団員たちの音楽の学びの質的変容は、音楽にかかわる「レディネス」の変容である。楽譜の書き込みが指導者とのコミュニケーションの履歴であったように、団員たちは指導者の言葉、楽曲をみる視点や解釈、よりよい音楽表現につなげていくための方法やコツなど、実に多くの内容を共有していた。その内容を共有する過程において、団員たちの音楽にかかわる「レディネス」が変容したのである。この音楽にかかわる「レディネス」は、岡田(2009)のいう「音を音楽として知覚するための枠組み」であり、同時に存在すると考えられる表現活動における「音を音楽として表現していくために必要な枠組み」であるととらえられる。これらの枠組みは、すでに存在しているのではなく、音楽の学びが質的に変容していくなかで、拡大されたり、深化されたり変容するものであるとすれば、音楽の生涯学習における学びの質的変容とは、活動のなかで音楽にかかわる様々な気づきによって、レディネスを変容させていくプロセスであるといえることができる。

本研究の課題は以下の2点に集約される。

第一に、楽譜の書き込みに関することとして、楽譜の書き込みという面から団員個々の学びの質的変容について詳細な検討を行うことができなかったこと、そして、本研究では音楽経験の少ない団員たちを調査できていないことである。楽譜

の書き込みに着目することは、団員たちの音楽の学びをとらえるうえで有効な手法であると考え。今後はさらにデータを収集し、団員個々の学びを縦断的にとらえ、その変容過程を明らかにするための手法として、楽譜の書き込みの分析を実施していきたい。

第二に、本研究では学習者の音楽の学びの内容とその質的変容を明らかにすることが研究の眼目であったため、指導内容と方法に対する教育学的な検討に至らなかった。指導者の存在は、東京プロイデ合唱団が学びの場として機能していることと非常に大きなかかわりをもっており、彼の指導のなかからは、成人や高齢者を対象とした音楽の生涯学習の指導法を検討していくうえで、重要な示唆が得られると思われる。また、指導者自身も活動を通して学んでいるという点は、今後の生涯音楽学習の研究に新たな視点をもたらすものであり、これらの点について今後考察を深めていく必要があると考える。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、《第九》を歌い続ける一つのアマチュア合唱団を対象に長期のフィールドワークを行い、団員たちが何をどのように学んでいるのか、さらには活動を継続するなかで彼らの音楽の学びがどのように質的に変容するのかを明らかにしようとする研究である。

本論は3章から構成され、第1章では、対象となる合唱団の指導内容と指導法に焦点をあて、指導の特徴を明らかにするとともに指導内容のカテゴリーを作成した。さらに、指導者自身が、同じ《第九》を繰り返し指導しつつも、新たな気づきや課題を見出していく、いわゆる「反省的实践家」として学び続ける存在であることを明らかにした。第2章では、団員8名の楽譜の書き込みに着目し、その内容を活動歴と比較しながら分析することによって、活動歴と書き込み内容との間にある程度のかかわりがあることが示唆された。また、書き込み内容が団員たちの音楽の学びそのものであり、指導者とのコミュニケーションの履歴として機能していることが実証された。第3章では、団員へのインタビューを通して、音楽の学びの質的変容を4観点に集約し、学びの質的変容過程には、変容を促す5つの契機があることを明らかにした。以上の考察を通して、合唱団の活動が学びの場として機能していること、団員たちの音楽の学びの質的変容は、音楽にかかわる「レディネス」の変容であることを結論づけた。

学位論文として申請された本論文が評価できる点は、以下の点に集約できる。

第一は、アマチュア合唱団の活動を音楽の生涯学習ととらえ、5年もの長期にわたって団員、観察者として合唱団にかかわり続け、収集した膨大なデータをていねいに分析して音楽学習の内実に深く切り込んだ点である。ミクロな音楽活動に焦点化し、生涯学習としての意義や価値を見出した研究は、これまでの先行研究には見られないもので、自らも合唱活動に参加し、団員側に立って指導内容の分析や解釈を試みている研究姿勢も高く評価できる。

第二は、継続的な観察、分析に加えて、アンケート、聞き取り調査、楽譜への書き込み分析など複合的な方法論でアプローチしていることである。とりわけ、楽譜への書き込みに着目した点は独創的である。書き込みの意図を団員へのインタビューによって裏付けをし、学びの軌跡として書き込みの意義を明らかにした点、さらには考察の客観性を担保したという意味でも価値がある。

その一方で、ていねいで緻密な分析作業に比べ、抽象化していくプロセスに甘さがあり、結論がややあいまいになってしまった点、先行する議論との比較が十分とはいえない点、用語の一層の吟味が求められる点などが課題として指摘された。

とはいえ、本論文が、音楽教育研究や生涯学習研究の分野において貴重な一石を投じる学術的内容を有していることはまちがいない。本論文を課程博士の学位取得に十分に値する論文と判断し、合格とする。